

京都の活断層

平成13年3月

京都市

3. 京都盆地周辺の活断層の概要

京都盆地周辺の接峰面と活断層の分布を図 I-6に示す。京都周辺の山地は断層地塊化しており、山頂付近に侵食小起伏面が分布するという特徴をもつ。この侵食面は鮮新世～更新世前期には形成が終了したもので、高位の若丹面と低位の摂丹面に二分されている（水山 1955）。その高度は丹波高地で800～900mと500～600m、醍醐山地や北摂山地で500～600mと300～400m程度と山地ごとに異なっている。比叡山地および醍醐山地は西を花折断層と黄蘗断層、東を琵琶湖西岸断層系に限られた地塁山地である。また、北摂山地の東縁は西山断層や光明寺断層、檜原断層によって低地と接している。京都盆地の東西両縁を限るこれらの活断層は南北走向をもち、3～5kmの間隔で並走するという共通性をもつ。また、北部の丹波地域と南部の京都盆地とでは縦ずれセンスが逆転しており、盆地北部に旋回軸をもつ蝶番断層的な性質をもつ点で注目される（吉岡 1987）。以下に、主な活断層の特徴を要約する。

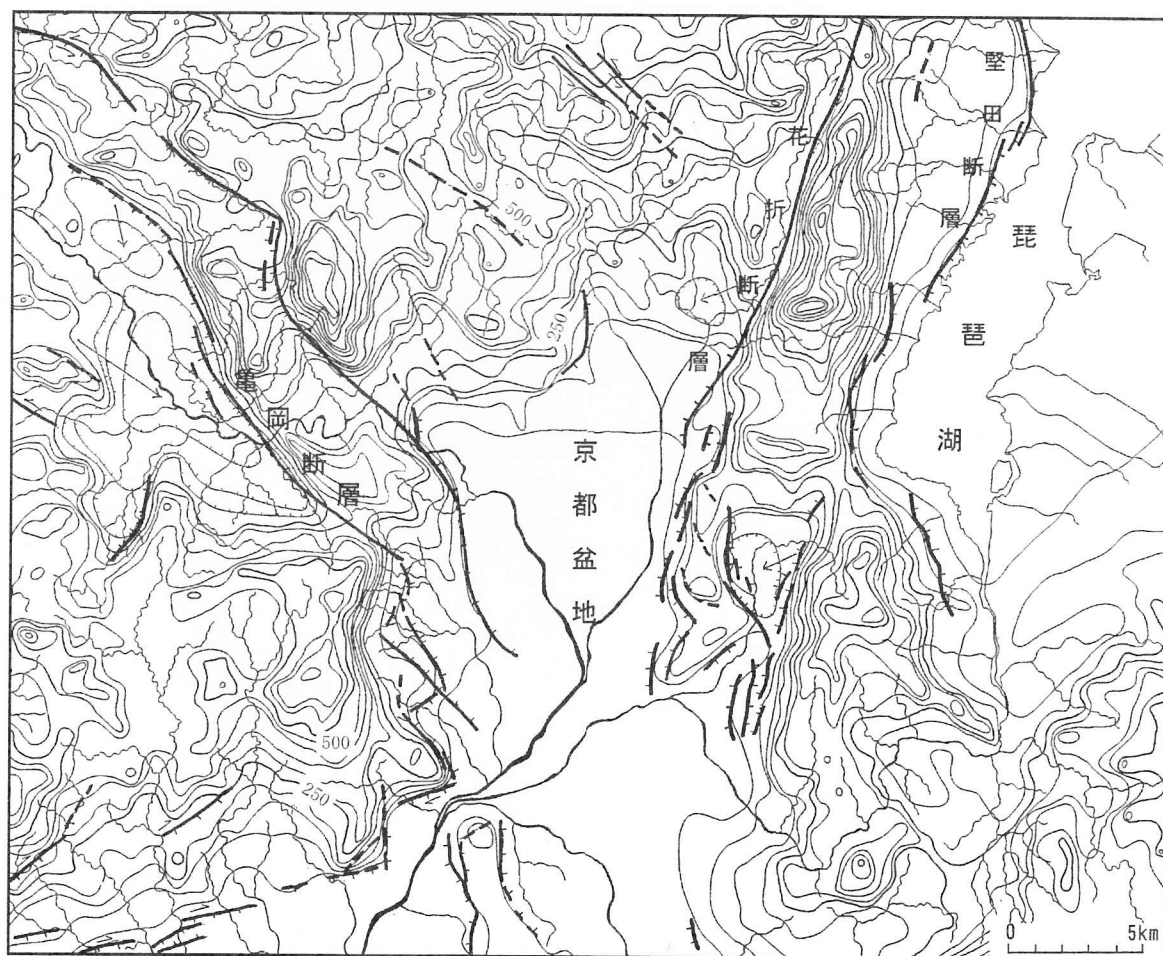


図 I-6 京都盆地周辺の接峰面（1km以下の谷を埋積）と活断層の分布
（活断層は国土地理院（1996）の都市圏活断層図より編集、接峰面図の等高線は50m間隔）

①花折断層

丹波高地と比良・比叡山地をわける全長約 50km の大断層である。北北東走向で、北は滋賀県今津町水坂峠から安曇川および高野川の直線状河谷を通過し、京都市左京区の吉田山付近に至る。第四紀における活動は右ずれ変位が卓越し、東側隆起を伴う。横ずれの活動度は A 級に達すると推定される (吉岡 1986)。本断層の北部は 1662 年地震時に三方断層とともに活動したことが明らかにされ、南部は 1.5~2.5 千年前に活動したと考えられている (吉岡ほか 2001)。Yoshida(1986)は本断層が前期鮮新世までに 10~20km の左ずれと東上がり 1.8~3.5km の縦ずれの運動をおこない、更新世中期に再活動し、東上がり約 200m の縦ずれ運動をおこなったと述べている。藤田・岸本 (1972) は中古生層と花崗岩類との境界に形成された構造線で、近畿三角帯の西縁をなす境界断層と考えている。

②琵琶湖西岸断層系

琵琶湖・近江盆地の西縁をかぎる地形境界にそって南北約 60km に達する断層帯をなす。北は滋賀県マキノ町の知内川断層から、饗庭野・上寺断層、比良・比叡断層、堅田断層、南端は大津市膳所・石山付近の膳所断層まで南北走向で雁行状に配列する断層群を一括したものである (東郷、2000)。また、琵琶湖湖底の西岸湖底断層系もこれに属し、最大幅で約 3km に達する断層帯を形成している。饗庭野や泰山寺野台地、堅田丘陵など山地東側の隆起部の東縁を限り、高位段丘から完新世の地形面にまで累積的な縦ずれ変位を与えている。比良山地東縁では、基盤上面の西側隆起量は約 2000m に達する。各断層の縦ずれの活動度は B 級中~上位であるが、断層帯全体としては A 級に達すると推定される。1662 年地震時の活動は見出されておらず、北部の饗庭野断層では 2.4~2.8 千年前の活動が最新期とされている (地質調査所活断層研究グループ 2000)。

③三峠断層系

丹波高地の西縁を限って福知山市南方から亀岡盆地東縁まで延長約 50km にわたり幅 5km の断層帯をなす。これをはさんで、浸食小起伏面の高度が 200m 程度西へ低下している。一般走向は北西~西北西で、三峠、殿田、神吉・越畑、亀岡などの各断層が雁行分布する断層群を形成する。北東側隆起で、左ずれを伴い、活動度は縦および横ずれとも B 級中~下位である。この南延長に檜原断層および灰方断層が位置している。殿田断層では世林地区のトレンチ調査によって、1.1 万年間に 3 回の活動が認められた。また、最新のものは B. C. 395~A. D. 100 年の間に発生した (植村ほか 2000)。

④有馬高槻構造線断層系

六甲山北側から北摂山地南縁を限って東西走向で約 50km にわたって連続する。北摂山地と大阪平野との地形境界をなし、直線状の連続性をもつ。右ずれおよび北側隆起の変位が卓越する。川西市や茨木・高槻市などでは地溝状凹地を形成しており、小規模なプリアパート盆地を生じている。横ずれの活動度は A 級、縦ずれは B 級と考えられる。東部の高槻セグメントでは、1596 年の慶長伏見地震時に活動し、それ以前では約 2800 年前の活動が認められている (地質調査所活断層研究グループ 2000)。

⑤生駒断層

生駒山地西縁の比高 200~300m の断層崖を形成し、南北走向で約 30km にわたって連続する。南は誉田断層から北へ、柏原・八尾市、東大阪市を通過、枚方市枚方丘陵の西縁まで、生駒断層崖にそって幅 1km の断層帯をなす。また、四条畷市から北東に分岐して北北東走向で長尾付近にいたる交野断層や、さらに左雁行して男山西縁まで連続する田口断層が含まれる（東郷 2000）。東側隆起の縦ずれ変位が卓越し、撓曲崖として連続する部分が多い。活動度は B 級である。最新活動は 5~7 世紀にあったとされる（地質調査所活断層研究グループ 2000）。

3.1. 花折断層帯

花折断層は近畿三角帯（前出 p19）の北西縁を限る断層の一部であると考えられており、北は滋賀県今津町水坂峠付近から朽木市場、花折峠を経て大原、吉田山付近まで延びる延長約 44km（活断層研究会 1991）の断層である。

断層線沿いの変位地形などから右横ずれ断層であり、地形面の上下変位などから上下方向の活動度は B 級の下位であると考えられているが、河谷の屈曲量と上流部の長さの関係を使った松田の経験式によって横ずれ成分の活動度を求めれば、A 級となる指摘もある。活動履歴については、トレンチ調査によって、1662 年の寛文地震の際、花折断層北部が活動したことはほぼ確実になっているが、南部についてはごく最近まで 2500y. B. P 以降に活動したという概略的な報告のみしかなされていなかった。しかし、ここ数年来にわたるトレンチ調査では活動最新時期が 2500y. BP~1500y. BP の間であることが報告されている。また、その活動間隔は約 4500~6500 年と見積もられることが報告されている（吉岡ほか 2001）。本断層帯における個々の断層の性状を表 I-1 にまとめる。活断層研究会（1980, 1991）

は、花折断層南部の地形面（沖積面および段丘面）の上下変位から上下成分の平均変位速度を 0.1~0.5m/1000y としている。また、吉岡（1986）は、河谷の屈曲量と上流の長さの関係をもとめた松田（1966, 1975a）の経験式を用いて、横ずれ成分の変位速度を北部の途中谷~市場で 2~14m/1000y、南

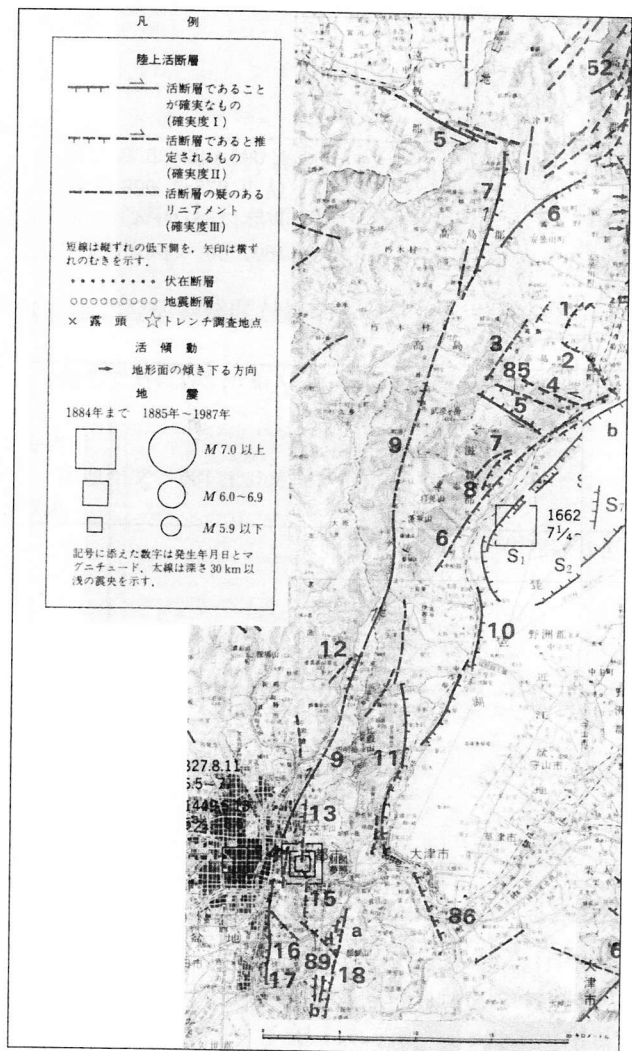


図 I-7 花折断層帯の概略位置
(活断層研究会 1991)

部の途中～大原で 1～10m/1000y としている。従って、上下成分はB級の低位であるが、水平成分は上下成分よりも1桁大きく、A級となる可能性もある。

表 I-1 花折断層帯の性状一覧表

断層名 (図 I-7の番号)	花折断層 (7, 9)	
	北部*1	南部*1
断層長 (活断層研究会編 1991 による)	44km	
平均変位速度 (m/1000y) (** - **間の単位は 1000 年) [地 点名]	2-14m*2 [途中谷～市場] 吉岡 (1986)	0.3m (0-30) [大原北] 0.2m (0-30) [大原南] 0.1m (0-200) [一乗寺] 0.3m 以上 (0-10) [一乗寺] 0.5m (0-30) [村井] 以上、活断層研究会 (1980, 1991) 1-10m*2 [途中～大原] 吉岡 (1986)
最新活動年代	1,090±80y. B. P. 以降 (A. D. 875-1,028 以降) 東郷ほか (1994, 1997) 460±60～360±60y. B. P. 吉岡 (1997b) 地質調査所 (1997)	2,500±80y. B. P. 以降 石田 (1967) 約 3,600y. B. P. 以降 吉岡 (1997a, b) 地質調査所 (1997) 約 2,500～1,500y. B. P 吉岡ほか (2001)
対応する歴史地震	A. D. 1,662 寛文地震 吉岡 (1997b) 地質調査所 (1997) A. D. 1,185 文治地震 東郷ほか (1997)	A. D. 1,185 文治地震 東郷ほか (1997)
活動間隔	?	3,500 年以上? 石田 (1967) 地質調査所 (1997) 約 4,500～6,500 年 吉岡ほか (2001)
1 回あたりの変位量	3.5m+ 東郷ほか (1997)	2.5m 石田 (1967) 0.5m (見かけ) 吉岡 (1997a) 地質調査所 (1997) 吉岡ほか (2001)
断層のタイプ	右横ずれ西側隆起	右横ずれ東側隆起

*1 花折断層は北部と南部で異なる活動履歴を持つ可能性が指摘されている (地質調査所 1997) ため便宜上北部と南部に区分しまとめた。ただし、その境界がどこにあるかについては不明。

*2 河谷の屈曲量と上流の長さを使った松田 (1996, 1975) の経験則より求めた値。

石田 (1967) は、花折断層南端部にあたる北白川上終町の工事現場に現れた断層露頭で、断層によって変位を受けた黒色腐植土層の ^{14}C 年代値を 2500±80y. B. P. であると報告している。すなわち、2500±80y. B. P. 以降 (縄文晩期以降) に花折断層南部が活動したことを示している。その後、地質調査所により今出川通りでトレンチ調査が実施され、その結果が吉岡ほか (1997a, b)、地質調査所 (1997) で報告されているが、約 3,600y. B. P. の ^{14}C 年代を示す黒土層が断層により変位を受けていることが確認された。さらに上位の地層が欠如していたため最新活動時期を決定するには至らなか

った。しかし、吉岡ほか(2001)では、京都市左京区修学院月輪寺町において実施されたトレンチ調査結果から、断層南部の最新活動時期が 2500y. B. P ~ 1500y. B. P の間である可能性を指摘し、他のトレンチ調査(地質調査所 1996)の結果をあわせると、断層の活動間隔が 4,500 ~ 6,500 年であると推定している。

一方、東郷ほか(1994, 1997)は、花折断層北端部付近の途中谷でトレンチ調査を行い、 $1,090 \pm 80$ y. B. P. の ^{14}C 年代を示す地層が断層により変位を受けているのを確認した。この年代は A. D. 875 ~ 1,028 (平安時代前記中頃)以降となり、この時代に該当する歴史地震として A. D. 1,185 の文治地震と A. D. 1,662 の寛文地震を挙げている。さらに、寛文地震は琵琶湖西岸断層系の活動によるものと考えられること、文治地震では花折断層沿いに位置する京都の白川付近で被害が大きかったことから、文治地震が花折断層の最新活動である可能性が高いとした。

しかし、地質調査所によりさらに南 500m の地点で行われたトレンチ調査により、吉岡ほか(1997b)、地質調査所(1997)は、 460 ± 60 y. B. P. の ^{14}C 年代を示す地層が断層による変位・変形を受け、 360 ± 60 y. B. P. の ^{14}C 年代を示す地層に覆われることを示した。すなわち 460 ± 60 y. B. P. ~ 360 ± 60 y. B. P. の間に最新活動が想定され、この間の歴史地震は寛文地震が知られているのみであり、この地域の花折断層は寛文地震の際に活動した可能性が高い、としている。また、この時の被害記録から判断して、花折断層の南部は活動したとは考えにくく、南北で活動履歴が異なる可能性を指摘している。

3.2. 琵琶湖西岸断層帯

琵琶湖の西岸付近には南北走向で西側隆起の活断層が多く発達している。これらを総称して寒川・佃(1987)は琵琶湖西岸断層帯とよんだ。水野ほか(1997)では、膳所断層、比叡断層、堅田断層、比良断層、拝戸断層、上寺断層、饗庭野断層および琵琶湖西縁の湖底断層などからなるとされ、南北約 55km に及ぶ活断層帯を形成している。

琵琶湖西岸断層帯は湖北を頂点とする近畿三角帯の北西縁付近に位置し、西南日本内帯の中で第四紀前期以降特に激しい地殻変動(六甲変動)が続いたとされている。琵琶湖周辺の地形・地質はこの活動により形成され、琵琶湖西岸断層帯は歴史時代を含む第四紀末期に活動したとされている。個々の断層については、中沢ほか(1973)、東郷(1971, 1974)、東郷ほか(1997)、村井・金子(1975)、池田ほか(1979)などの調査、報告がある。琵琶湖西縁の湖底断層については、

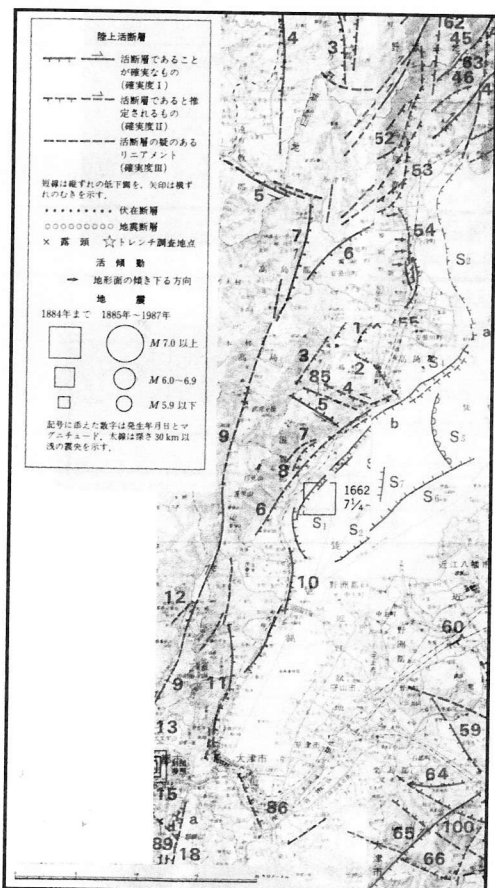


図 I-8 琵琶湖西岸断層帯の概略位置 (活断層研究会 1991)

植村・太井子(1990)などにより詳細が明らかにされてきた。

水野ほか(1997)では饗庭野断層(広川地区)、堅田断層(真野地区、衣川地区)でトレンチ調査・ボーリング調査を実施し、広川地区のトレンチでは、最新の活動は12~13世紀以前に起こり、湖底の断層を除いた平均上下変位速度は1.5m/1000年と見積もられている。また、東郷ほか(1997)は堅田断層(比叡辻地区)でトレンチ調査を実施している。竹村ほか(1997)は、ボーリングデータから堅田断層の平均上下変位速度を求め、1.5m/1000年を算出(圧密補正をして1.2m/1,000年)している。

表 I-2 琵琶湖西岸断層帯の性状一覧表(その1)

断層名 (図 I-8の番号)	膳所断層(86)	比叡断層(11)	堅田断層(10)	比良断層(6, 98)
断層長(活断層研究会編 1991による)	3km 5km*1	12km 8.25km*1	11km	18.5km
上下平均変位速度 (m/1000y) (** - ** 間の単位は 1000 年) [地点名]		0.3m(0-30) [坂本] 0.3m(0-20) [大原南]	1.2m(0-250)*2	0.5m(0-30) [鶴川]
最新活動年代				
対応する歴史地震				
活動間隔				
1回あたりの変位量				
断層のタイプ	西側隆起逆断層	西側隆起逆断層	西側隆起逆断層	北西側隆起逆断層

*1 国土地理院(1996)都市圏活断層図「京都東北部」「京都東南部」から図読

表 I-3 琵琶湖西岸断層帯の性状一覧表(その2)

断層名 (図 I-8の番号)	拜戸断層(2, 97)	上寺断層(1, 96)	饗庭野断層(54)	西岸湖底断層 (S1, S2, S4)
断層長(活断層研究会編 1991による)	8km	5km	8km	45km
上下平均変位速度 (m/1000y) (** - ** 間の単位は 1000 年) [地点名]	0.1(0-200) [大笹西方]	0.07(1-200) [上寺の北] 0.1(1-100) [上寺の北]		
最新活動年代				
対応する歴史地震				
活動間隔				
1回あたりの変位量				
断層のタイプ	南西側隆起逆断層	北西側隆起逆断層	西側隆起逆断層	北西~西側隆起逆断層

また、寒川・佃(1987)は、古文書などから寛文2年(1662年)の地震で琵琶湖の西側が水没している事実と照らし合わせて、琵琶湖西岸断層帯が、この寛文2年の地震で活動した可能性が高いことを示した。しかし、北部の饗庭野断層については、トレンチ調査の結果から、最新活動時期は約3000~2400年前であることが判明している(小松原ほか 1998)。一方、堅田断層、比叡断層など本断層帯中南部の断層の活動時期については、まだ明らかにされていないが、平成10年度に行われた地質調査所のボーリング調査により、堅田断層では約5000~2000 ¹⁴CyBP の間に変形運動があっ

1.3. 活断層

京都市域と周辺部は活断層の密度が極めて高く、それらが山地や丘陵、低地との境界付近に断層帯をなして分布する(図 II-7)。また、盆地内はほぼ全域にわたって市街地化しており、住宅と人口、生産基地が密集している。このような本地域の特質からみて、活断層の詳細位置やその諸性質を明らかにすることは、地震発生危険度の評価をおこなう上でも、地震災害の発生予測をおこなう上においても重要である。

本章では、京都市とその周辺に分布する活断層の分布と諸性質について述べる。とくに、断層変位地形の特色と変位様式、変位量と平均変位速度について詳しく記載する。変位量は測量調査によって得られた地形断面にもとづく値を利用する。また、活断層の諸性質については京都市の活断層調査や地質調査所による調査報告、公表された研究論文などの成果にもとづいて述べる。

松田ほか(2000)および地質調査所活断層研究グループ(2000)は、本市周辺の活断層について起震断層のグループ区分を提案している。この分類基準は、①約 10km 以上の長さを持ち、②約 5km 以上の間隔をもって独立しており、③断層の諸性質が同じである、ことによってグループ化するものである。両者の区分はほぼ同じであるが、西山断層帯について不一致がみられる。以下では、松田ほか(2000)に従って 4 起震断層帯に分けて記載する。

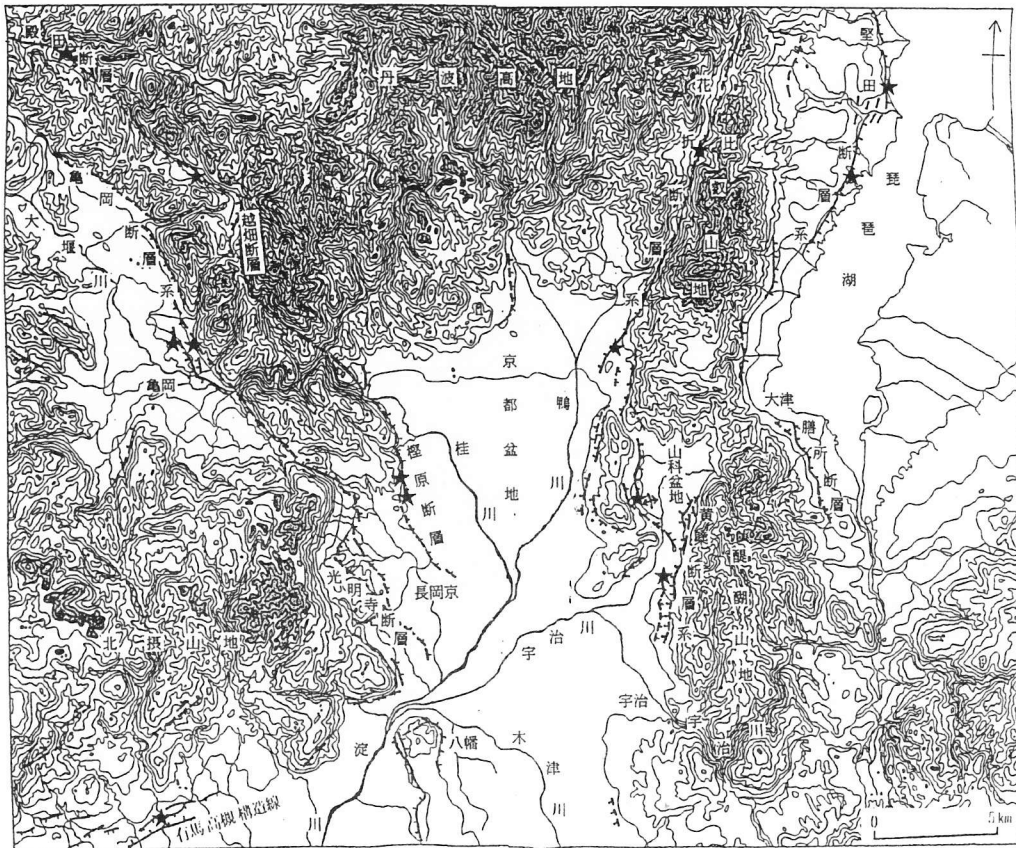


図 II-7 京都盆地周辺の主要活断層の分布およびトレンチ調査地点(★印)(植村原図)

(2) 花折断層帯

京都市周辺で最も著名な本断層は、丹波高地と比良山地との間の直線的な北北東走向の断層谷を形成する。本断層系の北端は滋賀県今津町水坂峠付近で、安曇川の谷にそって南下し大津市の花折峠を通過、京都市大原、八瀬、を経て岡崎まで連続し、全長約 50km に達する。京都盆地内では、左京区修学院から北白川、京都大学北部構内を通過、吉田山西縁を限って岡崎付近に至る。しかし、大津市途中付近の屈曲部を境に北部と南部に区分される。トレンチ調査によって、南北両側で別々に活動したことが判明し、二分するのが適当と考えられる。南部の長さは約 20km である。また、吉田山南端から左ステップし、東山山地の西縁を桃山まで約 10km 連続する桃山断層帯が連なる。直下型地震発生の被害想定によると、木造家屋の全壊は 15 万棟に達するとされ、最も注意を要する活断層といえよう。

1) 花折断層系南部

新期の変位地形は大原付近以南に見られる。小出石では西流する小谷に連続的な右ずれオフセットが生じており、累積量は 10~120m に達する (吉岡 1986)。三千院では L2 面を切る比高約 8m の低断層崖が発達している。修学院北方の梅谷川と寺谷川には屈曲がみられ、右ずれ量は約 40m、80m に達する (図 II-15)。また、音羽川の扇状地面上では 2 本に分岐しており、各々 1m 程度の東上りの低断層崖が形成されている。すなわち、断層崖の比高は東側の武田薬品農場で 1.1m、西側では赤山禅院の 1.6m、鷲森神社では 1.2m と測られた (図 II-20 B-2,3)。西側の断層トレース上での 50m 程度の流路の屈曲は横ずれを示す可能性がある。一乗寺小谷町付近には右ずれで上流を奪われた載

頭谷がみられ、約 100m の水平変位を生じている。京都大学農学部の試験農場や植物園には縄文後晩期以前に形成された白川の扇状地面（約 5000 年前に離水したと推定）を切って比高約 2.1m の低断層崖が 700m ほど連続する（図 II-20 B-4）。今出川からは吉田山の西縁に沿って白河養護学校を経て岡崎福ノ川町付近まで急崖が連続する。福ノ川町では沖積面に比高 2.6m の低断層崖が生じている（図 II-20 B-5）。南端の丸太町通では、ボーリングにより断層をはさんで AT 火山灰が東上りに約 5m の変位を受けている（吉岡他 1997）。

吉田山（高度 120m）は南北 0.8km 東西 0.3km の周囲より約 40~60m 突出した孤立丘である（図 II-16）。その西縁を花折断層により、東縁は神楽岡断層によって限られ、横ずれ運動に伴うフラワー構造を形成していると考えられる。丘は厚さ 30m 以上の風化した大阪層群（高位段丘堆積物の可能性もある）の砂礫層から構成され、平坦面はほとんど残っていない。丘は南へ傾斜しており、今出川通以北の部分は白川によって削り去られた可能性が高い。この丘の形成開始は大阪層群の粗粒化と山地の隆起が顕著になる約 40 万年前からと

推定され、縦ずれ変位量は東上り 80m 以上と推定される。P 波記録によると、南端にあたる丸太町通付近では数本に分岐しているようである。主断層のトレース下で、基盤上面の標高は上盤で約 60m（今出川通）、下盤で -120m（丸太町通）にある。場所が異なるので上下変位量の算定に適していないが、概数を把握すると縦ずれ変位量はおよそ 180m 程度と推定される。本断層の縦ずれ平均変位速度は約 2 万年間で 0.2~0.5m/1,000 年、40 万年間では 0.45m/1,000 年程度と B 級である。横ずれのそれは正確に求められないが、A 級の活動度をもつと推定されている（吉岡 1986）。

2000 年 9 月に修学院月ノ輪町の武田薬品の試験農地において、地質調査所によるトレンチ調査が



図 II-15 修学院付近における花折断層の変位地形
 ×印は地質調査所によるトレンチ地点
 （等高線は 2m 間隔、京都市 1996 に加筆）

行われ、縄文後期の地層を東上りに約 50cm 変位させる断層活動が確認された。また、今出川通のトレンチ調査でも、縄文後期の腐植土を切る断層が現れた（吉岡ほか 1997）。石田（1967）は北白川上終町の白川通で、縄文晩期の地層を切り古墳後期の地層に覆われる断層運動を報告している。また、白河廃寺跡から 8 世紀初頭を上限とする、理学部構内では弥生前期を下限とする噴砂が発見されている。これらは直接花折断層が活動したことを意味しないが、本断層の最新活動が弥生時代中後期に発生した可能性が大きいことを示唆する。

2) 神楽岡断層

吉田山東縁を限る長さ約 700m の断層で、花折断層と同走向をもつ。比高約 40m の西側隆起の急崖を形成している（図 II-16）。西傾斜の断層面をもち、花折断層から分岐したものと推定される。活動の詳細については資料が得られていない。

3) 岡崎断層

黒谷の丘（標高 98m）の東縁を限る南北走向の断層で、延長は 500m 程度である。この丘は南北約 600m、東西約 300m の規模をもつ（図 II-16）。南東部には基盤を構成する丹波層群が現れており、厚さ 30m 程度の大坂層群の砂礫層がこれをおおっている。本断層をはさんで、丸太町通の低地地下の AT 火山灰の高度に西上り約 5m の変位が生じている。また、P 波反射法探査とボーリング資料により、基盤上面に約 80m の西側隆起が推定されている（吉岡他 1998）。横ずれについては不明である。縦ずれは 0.2m/1,000 年の平均変位速度をもつ。黒谷の丘は花折断層末端に形成された横ずれ活動と密接に関連した変動性のバルジ丘と考えられ、吉田山と同じく 40 万年前以降に形成された可能性が大きい。

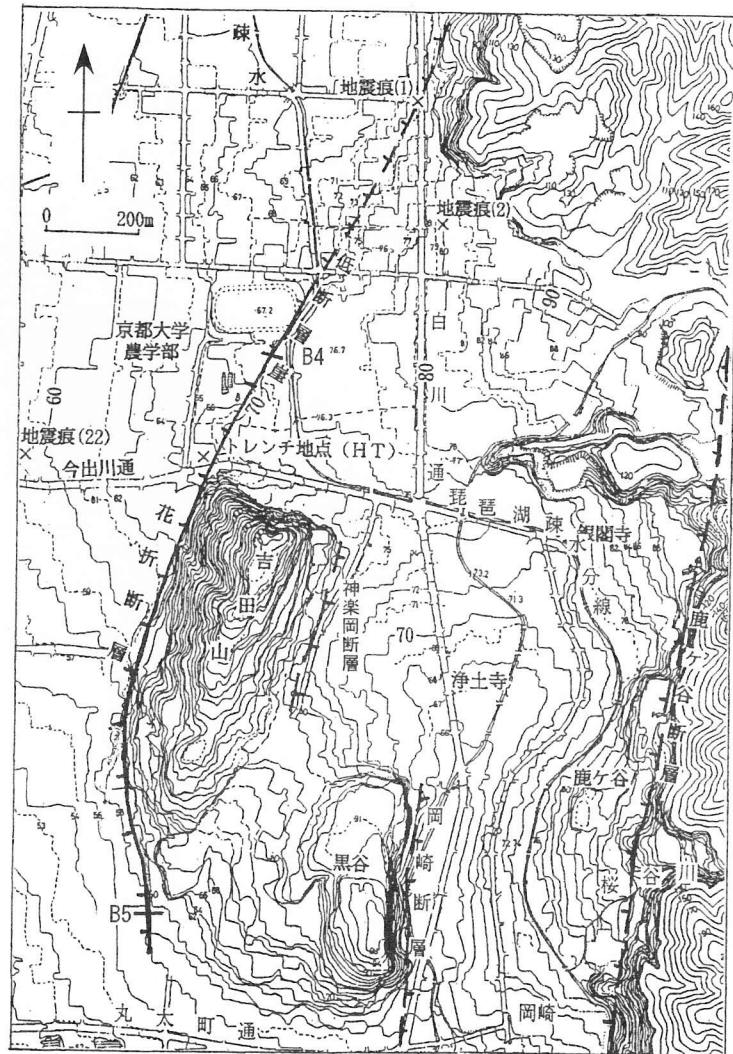


図 II-16 北白川—吉田山付近の断層変位地形詳細図
（等高線は 2m 間隔、京都市 1996 に加筆）

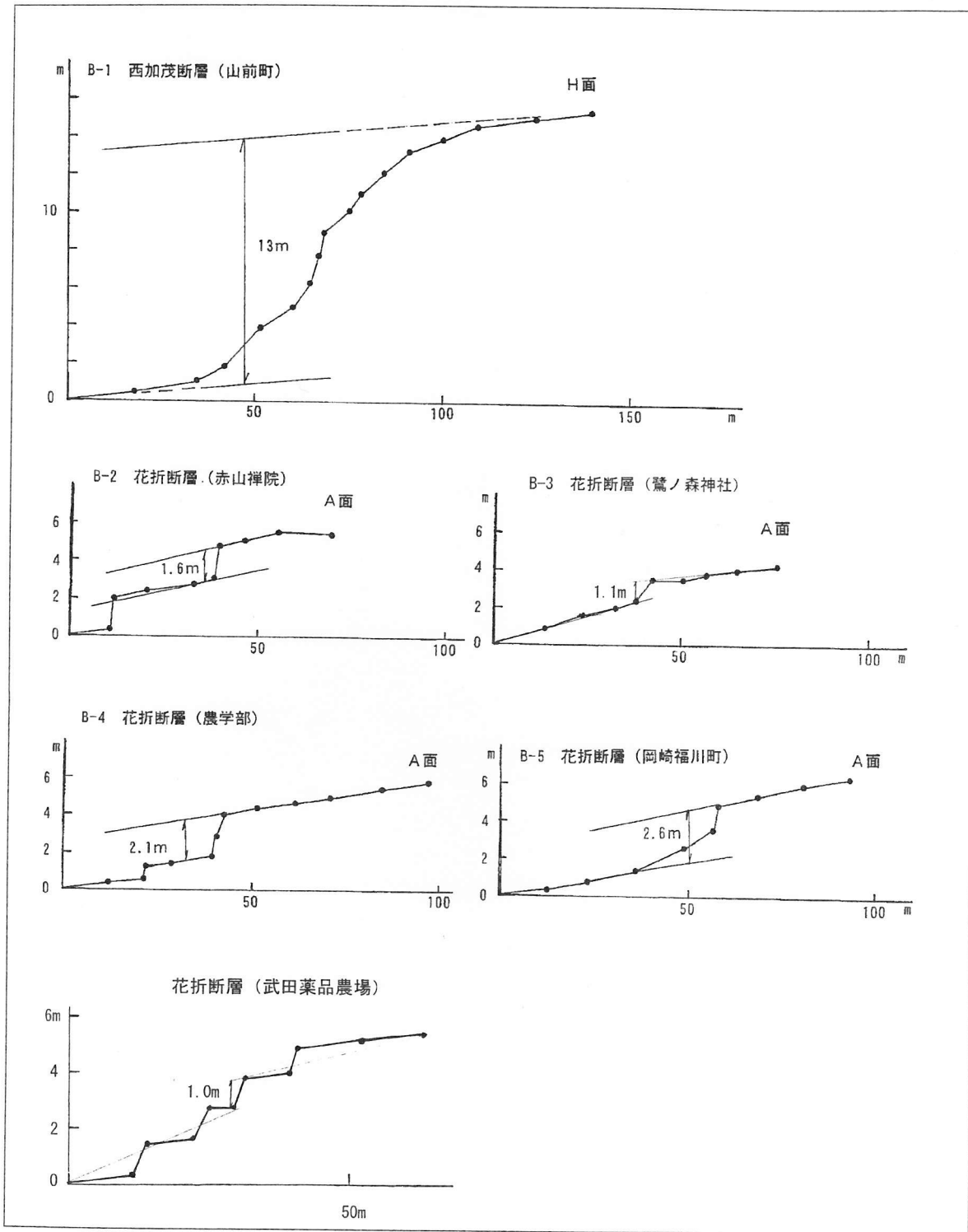


図 II-20 変位地形の実測地形断面 (花折断層帯) (植村原図)

3) 今出川測線

既存ボーリング資料から推定した吉田山西麓断層(花折断層)通過位置を挟む両側 16m の範囲で、深さ 15m の 4 孔のボーリング調査と深さ 2m の 2 孔の試掘孔掘削が行われた。

図 II-33 に調査結果を示す。調査範囲西縁の No. 4 孔では、地表から深度 1.38m までが盛土で、下位の深度 1.38~2.48m 間には、有機質な腐植土層が分布する。この腐植土層の最上部から 4,180 ± 60y. B. P. の、最下部から 6,370 ± 50y. B. P. の ¹⁴C 年代が得られている。この下位の深度 2.48~5.10m 間には、白川扇状地堆積物と考えられる花崗岩起源の不淘汰な礫混じり粗粒砂が分布する。さらにこの下位の深度 5.10m 以深には不淘汰な粘土質砂礫層からなる吉田山礫層相当層が分布する。

No. 4 孔から 24m 東へ離れた No. 7 孔では、地表部から深度 1.38m までが盛土で、深度 1.50~4.00m 間には吉田山礫層相当の不淘汰な粘土質砂礫層が分布する。その下位、深度 4.00~6.20m 間には、破碎された丹波層群の頁岩が分布し、更にその下位の深度 6.20m 以深には再び吉田山礫層相当層が分布する。

No. 7 孔から東へ 4m 離れた No. 5 孔では、地表部から深度 2.00m までが盛土で、深度 2.00~3.95m 間には吉田山礫層相当層が分布し、その下位の深度 3.95~8.20m 間には破碎された丹波層群頁岩が分布する。更にその下位には吉田山礫層相当と考えられる淘汰の良い中粒砂~細粒砂が分布する。この砂層と上位の丹波層群破碎帯とは、傾斜 74° の非常に明瞭な断層面で接している。

No. 6 孔は No. 7 孔から更に東へ 4m 離れている。地表部から深度 2.60m 間が盛土、深度 2.60~2.87m 間には白川扇状地堆積物と考えられる花崗岩質砂礫が分布し、さらにその下位の深度 2.87~3.50m 間には吉田山礫層と考えられる基質支持型の淘汰な角礫層が分布する。深度 3.50m 以深には、破碎された丹波層群の砂岩・頁岩が分布する。

No. 4 孔から東へ 8m 離れた試掘孔旧 No. 5 では、深度 1.0~2.1m に泥炭層が分布し、複数の縄文後期以降の土器片が含まれている。この試掘孔から東へ 8m 離れた試掘孔旧 No. 6 では、盛土下には泥炭層が全く分布せず、吉田山礫層と考えられる砂礫が分布する。

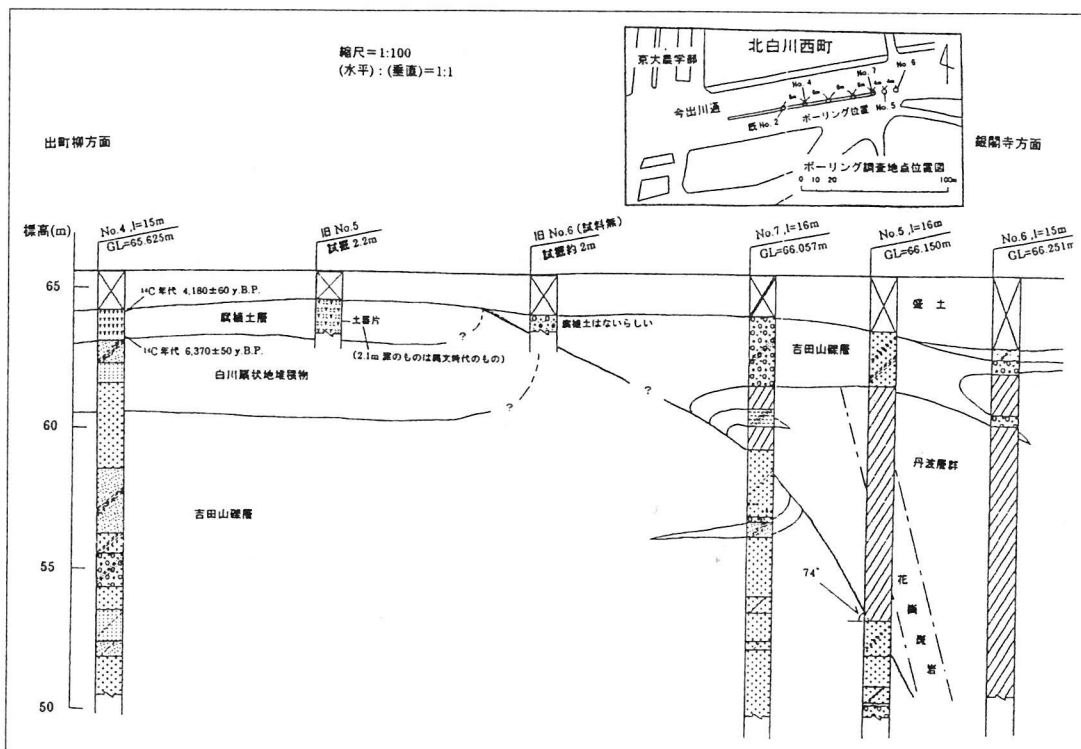


図 II-33 今出川通ボーリング柱状図と推定断面 (吉岡ほか 1997)

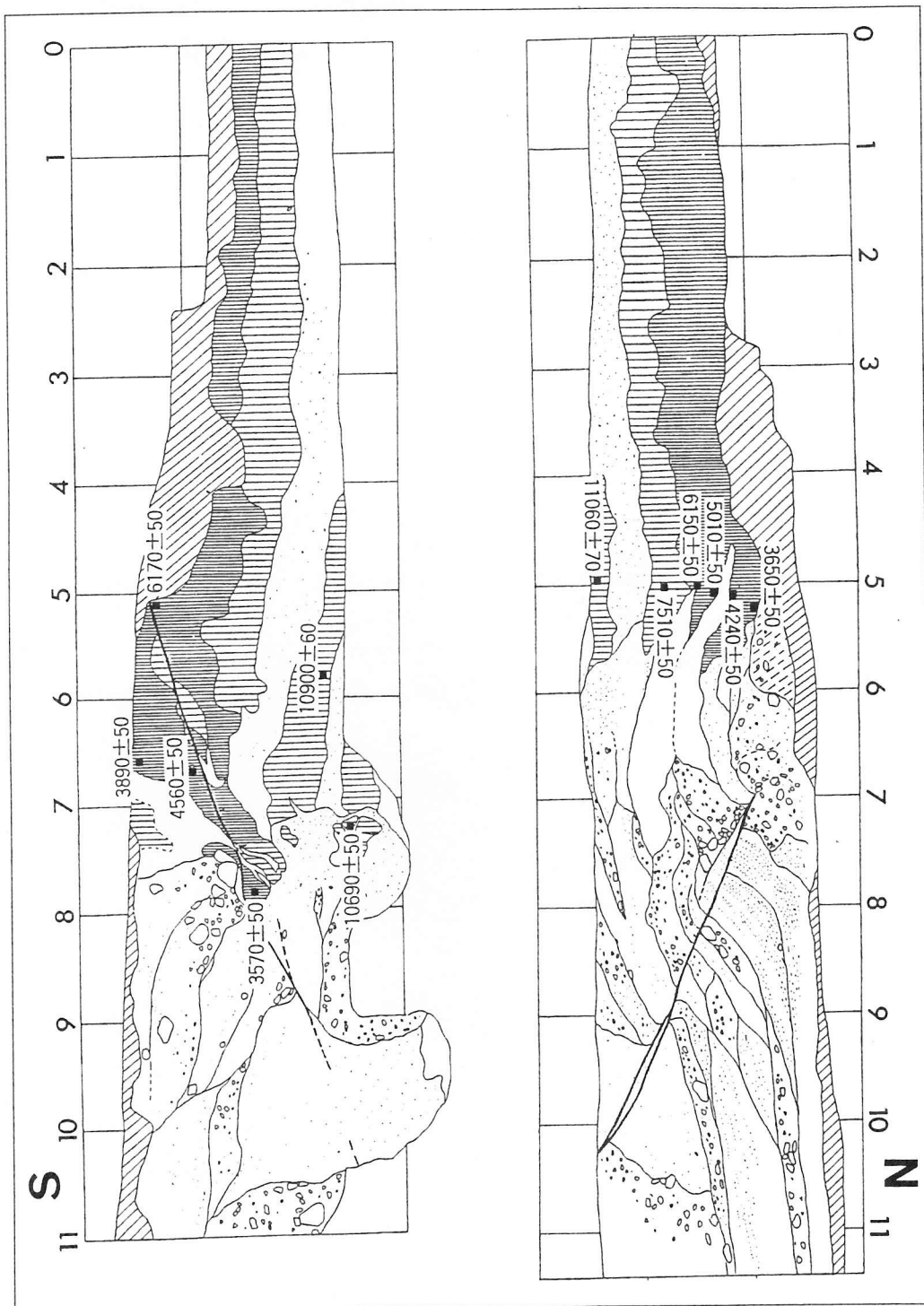


図 II-36 今出川トレンチ壁面スケッチ (吉岡ほか 1997)